

巻頭言

奥三河のミステリー

会長 渡辺 豊和

豊田市のイワクラ見学は面白かった。毎度何処でも面白いのだからわざわざいうこともないが今回はイワクラそのものよりも奥三河の歴史に興味があったからだ。

特に前田豊さんの著書『消された古代ヤマト』に記されていた持統天皇、文武天皇と三河との関係についてだ。持統天皇は天武天皇の皇后、文武は文武と持統の孫だが前田さんの著書ではこの二人の天皇は三河に数年滞在して行宮は勿論のこと都まであったとある。文武のことはよくわからないが持統天皇は『日本書紀』に詳しいからある程度まで知っている。書紀には三河に行幸した記事はなかったはずだ。

文武は『続日本紀』だろうが前田

さんの著述の範囲では『続日本紀』にそんな記事はなさそうだ。

となれば地元の伝説なのだろう。あの本によれば文武天皇の皇子が三河にきて土着したとあった。これも不思議といえば不思議。

持統、文武に関心があるのは実は私も天智天武兄弟の謎を中心にした原稿を書き上げたばかりだからだ。イワクラと直接関係はないのだが秦氏が大きくからむ。秦氏は間違いなくイワクラと深い関係がある。イワクラは縄文以来の信仰遺跡に違いがないが秦氏が活躍した五七世紀の二〇〇年間に秦氏は既存のイワクラをかなり修築したり配置しなおしている気配が濃厚なのだ。文献がないから確たる証拠はないし、巨石のことだから年代測定がままならない。だ

から曖昧な推定にしかならないのは致し方ない。

せっかく書きはじめたから天智、文武のことをいえば二人は舒明天皇と皇后の皇極天皇の兄弟皇子と書紀ではなっているが調べてみると天智は舒明天皇の子ではなく母皇極が再婚するときの連子だった。天武は真正正銘の二人の子。

天智は継子、天武は正統嫡子。

それなのに天智は天皇になりたくて権力者蘇我入鹿を暗殺して大化の改新を行い結局は天皇となる。弟の天武は正嫡だったばかりに乳児だったのに当時の権力者蘇我氏に危険視され九州に追放される。一六才でクマソを討って大和に戻るがこのときこのことは書紀では倭建のクマソ討ちとして描かれている。彼が九州から大和に上ってくるこのことは書紀では倭建のクマソ討ちとして描かれている。彼が九州から難波(当時の都)に上ってくるこのことは書紀では神武天皇東征記事だ。

日本書紀は今から二〇〇〇年以上前に即位した初代の神武天皇まで事

件の年月日が明記されている。記録なんてなかったとしか思えない時代のことなのにどうして年月日が明記できるのか。これにはからくりがあるに違いないと徹底的に調べ追求した結果、古い時代のことは後代の人たちのことで明るみにしたら奈良時代の大和朝廷に具合の悪い事件を転移していることがわかった。この本は「日本書紀の罫」としてそのうち書店にでるだろう。

それどころか歴史で習う倭の時代、応神、仁徳などの巨大古墳の時代、あれだけ巨大な古墳を造らせた天皇たちの時代だ、当然日本は統一されているはずだと誰しも思う。教科書でもそう書いてある。

ところが日本には四つの王朝が分立し対立抗争していたのだ。東北・関東の王朝、近畿の河内王朝、出雲王朝、九州王朝だ。古墳時代に当る中国の正史にそれこそはっきりと書かれている。

しかし歴史学者はこれを無視して一切取り上げない。その四王朝を統一して飛鳥に王朝を開いたのが、東

北・関東の蘇我の王朝だった。

蘇我氏こそ天皇だったのだ。それを滅ぼして奪権したのが天智天皇だ。

谷口美智代さんから鹿児島志布志町で天智天皇が晩年を過ごし死去した伝説のことをききそれを基点に「日本書紀」のからくりを挑んだわけだ。

天智が晩年をすごした志布志の近く高千穂峰の山麓に北斗七星のスターパターファイックを谷口さんは発見しているがこれもどうも秦氏によるものらしい。谷口さんは誰がそれを造ったのかは言及していないが私の予想ではそうなのだ。鹿児島神宮をつくった人々に違いない。「日本書紀の畏」でも鹿児島秦氏までは書いていた。

九州の宇佐神宮と鹿児島神宮ともに八幡宮でこれは秦氏の氏宮だ。九州の秦氏が乳幼児から一六才までの天武天皇の面倒をみたのだ。これを大和に上らせて天皇に押し上げたのも秦氏だった可能性が高い。秦氏は中部地方から西に限なく存在したからそれが天武の味方になれば強い

は当然なのだ。

持統天皇は天智の娘だが母は蘇我氏だった。天智天皇は自分が滅ぼした蘇我王朝の痕跡を徹底的に消した。

前田さんが東三河に大和や日下などの地名があり持統の行幸、文武天皇の三年間の滞在は「東ヤマト」王朝の痕跡を消すためだったとしているがそれは逆だった可能性の方が高い。

蘇我王朝は北海道、東北を南下ししばらく常陸で腰を据え一代位はいたのではないか。その遺跡が鹿児島、香取の両神宮だし高天原や大和の地名もありここが元ヤマトだった。それから東三河を通過するときも大和侵攻の準備をととのえるため何年かあるいは十年以上はここを都にしていたのかもしれない。

ヤマトは「ヤマトウ」で蘇我、秦、安倍の三氏が中央アジアから保持してきた「神都」の意味だ。「ヤマトウ」とはヘブライ語だそう。だから東三河のヤマトは常陸から持ち込んだ二番目のヤマト。三番目が奈良県のヤマトだ。それも大和高原にこ

の地名がある。秦氏が蘇我王朝の先遣隊となってまずここを攻略し大和征服の拠点とした。

邪馬台国はヤマタイであってヤマトとは全く意味が違いこれは九州肥後、阿蘇山の巨大カルデラに都のある倭国のことだ。

持統天皇は父が躍起になって消した東三河の蘇我王朝の痕跡を逆に復活させるために行幸し孫の文武はそれをさらに強化させるために三年滞在したに違いない。と私は思う。

常陸では鹿児島神宮の西北にイワクラの山、筑波山がある。三河でも大和、日下の西北にイワクラを抱く深山幽谷が控えている。地理関係が似ているであろう。蘇我王朝は飛鳥京をみてもわかるとおり巨石と深く関る文化を育んだ。常陸でも三河でも「神都」ヤマトが巨石と対になっているのではないか。

ただ奈良時代になって文武天皇の母元明天皇は極端なファザコンだったらしく父天智天皇を神格化したため天智の敵蘇我王朝の痕跡を破壊してしまった。このときに常陸からも

三河からも秦氏は追放されてしまったらしい。姉持統天皇、息子文武天皇の努力も結局は元明によって水の泡とされてしまったのだ。

このことと後世徳川家康の先祖徳阿弥が武蔵世田良（東京都府中市）から奥三河に流浪して辿り着き源氏幕府の祖となることと繋がりが極めてミステリアスなのだが紙数が尽きた。因みに秦氏から源氏になりこれが源頼朝を生み出している。

了